

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

三宅 俊浩

論 文 題 目

無意志自動詞を出自とする日本語可能表現の歴史的研究

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 宮地 朝子

委員 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学教授 齋藤 文俊

委員 名古屋大学准教授 志波 彩子

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、自発形式由来とされる日本語可能表現、とりわけ可能動詞およびカナウ・ナル・デキルの歴史的展開を精査し、変化の過程に合理的な説明を与え、日本語における「可能」の内実を具体的に捉えることを目的とする文法史研究である。

第Ⅰ部では、中世末期から近世後期の資料を基に可能動詞の成立と展開を論じる。まず成立について、形態的観点から自動詞類推説の妥当性を確認し、「読む」等の無対他動詞の自動詞派生を可能動詞派生の動機とする立場を支持する。一方、中世末期に現れ最初期の可能動詞とされる「読む(読める)」の用例が対象ガ格一項を取り、動作対象に生じる結果的变化の(非)実現を表す例に限られる点、難易表現ヤスイ・ニクイが承接する点など、後世の可能動詞とは異なる様相を示すことから、当該の派生動詞を当初から可能動詞と見ることに疑義を呈する(第1章)。論者はこれらの特徴が、同じ下二段活用の有対無意志自動詞(「切る」等)に共通する点、その無意志自動詞が「読む」同様、対象に何らかの阻害要因がある条件で結果非実現を表して可能概念に接する点に着目し、「読む」を含む近世前期までの派生下二段動詞を「無意志自動詞」と位置づける(第2章)。近世後期宝暦を画期とする急激な派生源の拡張や、明らかな動作主可能用法の獲得に至るまでの用例に、動作対象の特定性の希薄化、動作主の特定性と行為の意志性の強化を見出し、これを自動詞から可能動詞への変化と位置づける(第3章)。室町後期抄物資料に偏在する尊敬用法にも、後世の可能動詞や助動詞(ラ)と異なる運用実態を指摘し、本論文の立場から説明を与える余地を見出す(第4章)。

第Ⅱ部では可能動詞の展開の一側面として、派生源が一段動詞に及んだ現象とされる「ラ抜き言葉」の成立を論じる。論者はまず方言間の運用の多寡に進行の遅速を見出し、運用が豊富な尾張方言の近世期文献を精査して、中央語に比べて約100年早い出現を指摘する(第5章)。さらに尾張方言で「ラ抜き」による可能動詞派生が生じた独自の条件を考察し、ラレル形尊敬用法の豊富な運用、高頻度のラ行五段動詞オル(ラレル形オラレル：可能動詞オレル)の存在が、ラの有無による機能対立の異分析を導いたとする新見解を提示した(第6章)。

第Ⅲ部では、先行論で自発由来とされるカナウ・ナル・デキルの歴史記述を行い、類型性と個別の特徴とを見出す(第7～10章)。第Ⅰ部の検討を踏まえ、可能動詞・ナル・デキルは共通して行為の結果局面を表す用法を出発点とし、いずれも中世室町期に可能形式化を果たしているとする。一方、カナフはあくまで動作主の思念内容それ自体の(非)実現を表すところから可能形式化したとする。

終章では本論全10章で論じた個別形式に関する観察を総括し発展的課題を述べる。結果局面を取り上げる無意志自動詞が可能表現化する文法史的な動機については、中世室町期以降生じたとされる、運動動詞のアスペクト(時間的局面)性の変化、動的叙述性・意志性の強化との関連を示唆する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

日本語の可能表現は、その通時的・共時的・地理的多様性から研究課題として広く関心を集めている。日本語の可能表現の多くを自発由来と位置づける見方は有力ながら、個々の項目に即した歴史的事実については資料の制約も大きく部分的断片的であった。未解明の点も多く、先行説の検証・精緻化の余地も認められる。

このような研究状況に対し、本論文は、いわゆる可能動詞およびカナウ・ナル・デキルについて、自発形式のなかでもとりわけ無意志自動詞出自の可能表現と位置づけ、現在進行中のラ抜き言葉（一段動詞からの可能動詞派生）も射程に入れた史的観察であり、緻密かつ体系的な可能表現史として類を見ない野心的な成果である。

各章では、形態・統語・意味・運用面の諸条件を論拠とする多角的な検証が行われ、先行説の不備や不整合を補う見解が随所に見られる。成立当初の下二段派生動詞を無意志自動詞と位置づける見方は、形態的・語彙的特徴に基づいて最有力とされてきた自動詞類推説の説得力を高めることにまず貢献した。のみならず、最初期の下二段派生自動詞「読む」と有対自動詞の可能（結果実現）用法との諸条件の重なり、また後世の可能動詞の表す可能との異なりに着目して具体的な論拠を重ね、この先行説の課題や未解明の問題、例えば近世期中の「発達」の内実にも、制約の解除の過程を具体的に記述して、合理的な説明を与えている。「無意志自動詞」という位置づけは、却って、当該の派生動詞と自動詞、さらに自発と可能の異なりについて、論者の示した緻密な分析記述を見えがたくする恐れもなしとしないが、第Ⅲ部のカナウ・ナル・デキルの史的展開との共通点を見出す本論文の基軸として見るべきものがあり、文法範疇としての「態」の本質的追究を促す提案として評価に値する。

史的变化過程の観察は、言語資料の公開整備も受け、可能な限り広範な文献資料を渉猟して、精密周到である。また、第Ⅱ部の「ラ抜き言葉」の成立に関する考察は、方言分布を基に、尾張方言という地方語文献を用いて方法論的制約を打開し、説得的な新説の提示を果たすなど、具体的成果を導いている。

論者の立論が徹底して言語事実に即して行われている点も特筆すべき長所である。第Ⅲ部では、カナウ・ナル・デキルの史的記述が、実証的な語誌としての成果に留まらず、各々の「可能」「自発」の内実や差異を具体的に描き出し、また文法概念としての「可能」「自発」を多角的に再検討する文法史的追究として昇華している。

本論文の課題としては、調査対象文献の拡大と資料性のより精密な検討、文体差や位相差を考慮した考察、漢文訓読由来の可能表現を含む使い分けの様相にも踏み込んだ議論の必要などが指摘できる。しかし、これらの点についても論者は自覚的であり、本論文の検証と精緻化を目指す研究の取り組みによって十分に克服されうる。

以上より、審査委員一同は一致して、本論文が博士（文学）学位に相応しい成果であると判定した。